

談話の展開における「だから」の機能

尹, 虎 / Yin, Hu / Ren, Li / 任, 麗

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

96

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2010-03-18

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005961>

平成21年度 国際日本学論叢第7号 2010年3月18日発行 抜刷

談話の展開における「だから」の機能

長春理工大学日本語学部講師

任 麗

政治学専攻博士後期課程3年

尹 虎

談話の展開における「だから」の機能

長春理工大学日本語学部講師

任 麗

政治学専攻博士後期課程3年

尹 虎

1. はじめに

1.1 本研究の目的

ある対象に対する人間の理解がどのように成立するものなのかについて、これまで言語学、哲学、心理学から知識工学、認知科学など多くの分野で研究が進められてきたが、談話分析という分野は1960年代から1970年代初頭にかけて、言語学とその隣接諸分野（哲学、心理学、社会学、文化人類学、人工機能の研究など）における言語コミュニケーションの研究から生まれた。その後、統語論・意味論といった従来の文法レベルでは、人間の言語理解を説明することが困難だということが徐々に分かってきたため、文脈を考慮に入れた今日では、語用論の研究・談話分析の研究が盛んになってきた。日本語のコミュニケーション能力の分析とともに、談話における接続表現の文脈展開機能の解明も、いっそう重要視されてきたのである。

「だから」は、一般的に結果・結論を導く因果関係を表す接続詞とされているが、実際のコミュニケーションの場を考えてみると、例外も存在する。

談話の展開における「だから」の機能

例えば、次のような場合を考えてみよう。

南：何持ってんの。

瀬名：えっ？

南：それ。

瀬名：だから、これ、領収書。いや、みんな、みんな領収書よ。

(『ロングバケーション』)

この談話例には、接続詞の「だから」が存在するが、前後の因果関係を表すというよりは、単なる場つなぎのマークと見受けられる。このように、原因・理由を表さない「だから」の用例は実際のコミュニケーションでは数多く見られ、談話の構成に積極的に機能している。すなわち、一種の談話展開機能を持っていることが分かる。

近年、談話における「だから」の諸用法の研究は若干あるものの、「だから」の話題展開機能、並びに談話の結束性と整合性に対する作用に関しては、まだ残る課題が多いように思われる。

本論では、談話の全体的構造における接続表現「だから」のコミュニケーション機能を、大量の日本語のデータからの用例によって考察し、本来の接続表現の談話展開機能をより動的に把握することを目的としている。具体的には、談話における「だから」の話題展開、「だから」が談話の結束性と整合性に対する作用について検討する。

1.2 本研究の資料収集

1.2.1 資料の有効性

現在、日本では言語表現自体が多様化しており、話し言葉と書き言葉が密接に関係していく傾向は、ますます顕著である。佐竹（1995）はこの現象を「新言文一致体」と指摘している。また、半沢（2001）は、「とりわ

け日本語においては文章と談話の乖離という従来の現実と意識があるゆえに、より簡便で迅速なコミュニケーションの可能な談話のように傾きつつある」⁽¹⁾とし、「コミュニケーションにおける談話の優勢化さらには一元化という可能性を示すもの」⁽²⁾であると指摘する。結果的に、話し言葉の形式が書き言葉に入り込むものとして、新言文一致体があり、佐竹（1995）の説によると、それは若者雑誌の文章やジュニア小説の談話の部分に典型的に見られるほか、漫画の言葉、インタビュー記事、インターネット上のBBSやチャット、メールなどのコミュニケーションで用いる表現も新言文一致体になることが多い。

また、会話分析ではできる限り自然なデータを収集するのがもっとも望ましいが、一方で、メイナード（2004）が指摘するように、談話言語学では伝達を目的として、創造されたディスコースすべてがデータとなる可能性がある。「それは放送メディアやインターネットなどを媒介として消費される日本語であり、人々の会話であり、小説や論文であり、すべてが文化の一部として創造された言語の作品とも言えるものである」⁽³⁾。

自然の録音資料は入手不可能であり、また少数の自然会話を資料として、接続表現「だから」の談話機能を調査するのは不十分かつ説得性がないとの考えから、本論では、「新言文一致体」と談話言語学の主張を考慮に入れて、話し言葉と書き言葉を含めた広範囲にわたる談話における「だから」の機能を考察することにする。

1.2.2 資料のジャンル

本論では、なるべく現在の日本語の姿を反映するように、実際に使われる「だから」の用例を様々なメディア、ジャンルから選ぶようにした。以下の資料は、談話における「だから」の話題展開機能並びに談話の結束性と整合性に対する作用を考察するのに、ふさわしいものと判断する。

本論が利用する資料：

a. 映画・テレビドラマ

『生きてみたいもう一度—新宿バス放火事件』（脚本：渡辺寿）

『妹よ』（脚本：水橋文美江）

『ふぞろいの林檎たち』（脚本：山田太一）

『ロングバケーション』（脚本：北川悦吏子）

b. 小説

芥川龍之介『鼻』

石川達三『青春の蹉跎』

久米正雄『学生時代』

椎名誠『新橋鳥森口青春篇』

谷崎潤一郎『痴人の愛』

田山花袋『生』

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

村上龍『希望の国のエクソダス』

山田太一『飛ぶ夢をしばらく見ない』

c. 随筆

三木清『人生論ノート』

上野千鶴子『40歳からの老いの探検学』

d. 漫画

前原滋子『そばにおいでよ』

e. 新聞

朝日新聞

f. テレビトーク番組

『さんタク』

g. 二次資料としての録音

ザトラウスキー（1993）勧誘場面の会

h. インターネット上のチャット

<http://chat4.teacup.com/chat?r=15>

http://chat.studio.cx/o-cha/syo_hajime

2 本研究に関連する先行研究

2.1 談話および談話分析

2.1.1 談話（テキスト）とは何か

「談話」(discourse) という用語はもっぱらアメリカの研究者が用いているが、「テキスト」(text) はどちらかといえばヨーロッパの研究者の論文で使われている。メイナード (1997) の説によると、談話は「実際に使われる言語表現で、原則としてその単位を問わない。言語一語でも談話と言えるが実際には複数の文からなっていることが多く、何らかのまとまりのある意味を伝える言語行動の断片である」⁽⁴⁾と定義している。

2.1.2 談話分析

談話分析の定義は言語学者それぞれの立場によって多少異なるが、談話を研究対象とし、その仕組みと働きを明らかにしようという目的においては大方の見解が一致している。

橋内武 (1999) によると、「狭義の談話分析 (discourse analysis, DA) は談話文法で代表される言語分析 [言語学的談話分析] を指し、会話分析 (conversation analysis, CA) のような実証的な談話研究とは対照的なものとして性格づけられる (Levinson 1983: 286f.)。談話文法は言語学 [特に文法論] の流れを汲み、仮説を立て、それを言語研究者の内省によって検証する演繹的方法を採る傾向にある」⁽⁵⁾。

また、従来、話し言葉と書き言葉は別個の範疇のように扱われがちだが、メイナードは、橋内 (1999)、野村 (2000) や半沢 (2003) 等の論説を土

談話の展開における「だから」の機能

台に、話し言葉、書き言葉の別は問わず、談話分析を広義にし、「話し言葉を分析の対象とする『会話分析』も、広義の『談話分析』の一部であるという立場をとってきた」⁽⁶⁾。本論も談話分析を広義に捉え、話し言葉、書き言葉の別は問わずに、接続表現「だから」の談話展開機能について、考察する。

2.2 「だから」の接続詞としての文法的意味

ここでは、まず、接続詞として辞書に載っている「だから」の文法的意味を挙げる。

先行の事柄の当然の結果として、後続の事柄が起こることを示す。理由を示す。(『日本国語大辞典』)

前に述べた事柄が、後に述べる事柄の原因・理由になることを表す語。(『広辞苑』)

上記の定義から、「だから」は複文の中で、前件と後件を因果関係で結ぶ役目を担っていると言えるだろう。本論は談話における「だから」の話題展開、「だから」が談話の結束性と整合性に対する作用について考察するが、実際のコミュニケーションの場における「だから」は、原因・理由を表す基本的意味に関連することも多いので、「だから」の文法的意味も常に頭に入れておくことが必要である。

2.3 談話における「だから」の機能

九
一
メイナード(1989)は会話における「だから」の使用について分析した。基本的な機能として、まず①その文化で、ある情報や説明がそれに関連した結果や結末を導き出すのに十分であると理解されるときに使われ、次に②会話の中で、既知情報に説明を加えるという主体の意図を伝える時のシ

グナルとして使われる、と提案した。その後、幾つかの研究がなされてきたので、概観しておきたい。

谷崎 (1994) は、会話における「だから」に意味論的機能と語用論的機能を認め、合計八種の機能を挙げている。前者には、結果・結論を導く、一般化を導く、具体化を導く、の3種があり、後者には結論の明確化要求を導く、省略化された結果を導く、推論した結果を導く、返答を導く、理解要求を導く、の5種がある。

加藤 (1995) は、「だから」の用法に潜む主体的側面を強調し、「だから」は必ずしも原因-結果ではなく、むしろ前提-帰結の関係に基づいていることを指摘している。

Mori (1999) は会話で、特に相手から同意を得ることを求めるときに使う「だって」と「だから」の機能を比較しているが、「だから」は、話し手がすでに述べたことではっきりしなかった部分を取り替えたり、言い換えたりするその前置きとして使われると述べている⁽⁷⁾。

メイナードは (2004)、感情的な側面や対人関係を前景化する場合の「だから」を細かく分析した。①情意の表現としての「だから」:「わかってよ」というアピール。②言語主体の態度を表現する「だから」:説明の予告と挑戦的な態度の表現。③会話行為の管理のために使われる「だから」:「聞いてよ」という注意トピック管理。これらの機能は場交渉論⁽⁸⁾の立場から考えると、「わかってよ」というアピールは情的態度の表明に、説明の予告と挑戦は対他的態度の伝達に、「聞いてよ」という注意とトピック管理はともに参加行為の管理に当たる。

以上の先行研究は談話における「だから」の用法を考察する面では一致するが、その分析角度と分析方法には多少違いがある。メイナードは当初会話における「だから」の使用をごく簡単に分析したが、その後、感情的な側面や対人関係を前提として、「だから」の用法を細かく分析した。また谷崎は意味論的機能と語用論的機能の両方を考え、「だから」の8種の

談話の展開における「だから」の機能

機能を挙げている。加藤は「だから」の用法に潜む主体的側面を強調している。さらに、Moriは「だって」と「だから」を比較して分析した。

以上、「だから」についての先行研究を概観してきたが、いずれの研究も、談話における「だから」の話題展開機能並びに談話の結束性と整合性に対する作用について論じたことがないことが分かる。しかし、実際のコミュニケーションでは、如何に談話を展開させるか、また如何に発話の複数の要素を考え合わせ、談話をスムーズに進行させるかという点において、「だから」が重要な役割を果たしていることは否定できない。また、理論上でも、談話の展開と連鎖的構造において、「だから」という接続表現は特別な重要性を持っている。本論では、以上の先行研究をふまえ、「だから」の話題展開機能並びに「だから」が談話の結束性と整合性に対する作用を解明するように試みたい。

3 談話における「だから」の話題展開機能

実際の談話では、話題は次々に展開していくものであり、話題の展開を理解することができなければ、コミュニケーションに支障をきたすものと思われる。佐久間（1990）は接続表現にかかわる中心文の機能を3類10種に分けているが、佐久間（2000）はさらにそれを踏まえ、3類14種の文脈展開機能を提出している。「接続表現の文脈展開機能とは、文章・談話の文脈を先へと展開させ、完結し、統一ある全体的構造を形成して、情報を伝達する働きのことである。すなわち、相手に伝えようとする話を始めて、続け、終わるという文章・談話の話題展開機能である」⁹⁾。

八
九
なお、話題の規定についても、佐久間の説をとることにする。佐久間（2000）は、『話題・話』の概念規定は、伝達する情報の中心的な内容を言語で表現したものという、ごく常識的な定義による。最小の話題が一对の『提題表現』と『叙述表現』からなることから、一話題が単独の文や節

表1 接続表現の文脈展開機能による分類*

	文脈展開機能	接続類型	接続表現の例
A 話題開始機能			
a1	話を始める機能	転換型	ソレデハ・デハ・ジャア
a2	話を再び始める機能	転換型	サテ・トコロデ・デ
B 話題継続機能			
b1	話を重ねる機能	添加型/対比型/補足型	ソシテ・サラニ/マタハ/ナオ
b2	話を深める機能	同列型/補足型	タトエバ・スナワチ/ナゼナラ
b3	話を進める機能	順接型/逆接型/対比型	ソコデ/ケレドモ・ガ/ムシロ
b4	話をうながす機能	添加型/順接型	ソレカラ/ソレデ・デ・ダカラ
b5	話を戻す機能	転換型	トコロデ/サテ・ソモソモ
b6	話をはさむ機能	順接型/逆接型/補足型	ダケド・デモ/タダ
b7	話をそらす機能	転換型/補足型	デ/タダ・モットモ・チナミニ
b8	話をさえぎる機能	逆接型/補足型	デモ・ダケド・シカシ/ダッテ
b9	話を変える機能	転換型/逆接型/補足型	トコロデ・ジャ/シカシ/実ハ
b10	話をまとめる機能	同列型/順接型/転換型	要スルニ/従ッテ・ユエニ・トニカク
C 話題終了機能			
c1	話を終える機能	順接型/転換型	コウシテ・トイワケデ/ソレデハ・ジャア
c2	話を一応終える機能	順接型/転換型	ダカラ・ソコデ・デ/デハ・ジャ

* 佐久間（2000）を元に作成。

によって表されることもあるが、原則として、一話題が一段を成立させると考えられる」⁽¹⁰⁾と指摘している。

以上の表1からわかるように、佐久間の分類はすべての接続表現に対してのものであり、一つの単独な接続表現を詳しく考察するのではない。佐久間の分類では、「だから」は2箇所見られるが、「だから」の話題展開機能に関する考察や分析が行われていない。本論では佐久間の分類を参考し、また佐久間が「話をうながす機能」「話を一応終える機能」の語例として「だから」を挙げたことを考慮に入れ、「だから」の話題展開機能及び分類や分析について、全般的な考察をする。「だから」には、具体的には以下

談話の展開における「だから」の機能

の機能がある。

- (1) 話を始める機能（新しい話を始める）
- (2) 話を重ねる機能（前の話を繰り返し、同じ話を重ねる）
- (3) 話を進める機能（前の話の結果や進行を述べる）
- (4) 話をうながす機能（話が先へ進むように相手をうながす）
- (5) 話を一応終える機能（前の話をしめくくり、終了する）

次に、談話における「だから」の話題展開機能について、上記の分類のそれぞれを詳しく分析する。

3.1 話を始める機能（新しい話を始める）

ここでの「だから」は因果関係が弱い、「話を始める機能」を持ち、話題展開の言語手段として重要な役割を果たしている。また、実際のコミュニケーションの場において、発話注目要求という働きもある。「だから」で話題を始める場合と、前の話をそらして別の違う話を始める場合との二つのパターンがある。

例1

さんま：そういう教育

木村：だめだ。

さんま：そういう教育。わかった？だから、今日は

木村：はい

さんま：てきとうなこと言うけども、君はやっぱりアイドルとかスーパーアイドルやから、ここは放送しないでくれとか、ここはやめて欲しいのは、後々、言ってくれよ。

(『さんタク』)

例 2

「仕事仕事なんて、ヒーヒーいっている奴は、俺にいわせりゃあ、
バッカバッカしくて」

「そうさ。俺とお前の生き方の違いだ」
(どンドン歩く)

「だから、そんなつっぱって歩くなよ」

(山田太一『ふぞろいの林檎たち』)

例 3

すると、ふいに器械の赤いランプがついた。ランプがつくとき、いつもブザーが鳴るのだが、そのときブザーは鳴らなかった。赤いランプは音もなく明滅して、しきりに合図を送ってきたが、関さんはただその白い額にランプの色を映すばかりで、そのむなしい交換をみているうちに、関さんの死はしだいに実感の重みを増して私の胸底を圧迫した。私は、壁づたいにすこしずつ扉の方へ移動しながら、関さんの魂にむかって無言でいった。

「だから、僕はいったのです。いっしょに脱出だと。僕のせいじゃない。僕のせいではないのです。」

(三浦哲郎『忍ぶ川』)

例 1 において、さんまは前の話と違う話題を導入しようとするのだが、前の話をそらし、新しい話題を始めるきっかけとして、「だから」を使っている。それを察した木村は「はい」と受けの態勢になっていることを知らせる。例 2 も同じで、「だから」によって、前の話と違う新しい話題をするという「話を始める機能」を持っている。例 3 は、「関さんの死はしだいに実感の重みを増して私の胸底を圧迫した」ので、何の先行発話もなく、「私」は「だから」によって内心の告白をし、話を始めるのである。

3. 2 話を重ねる機能（前の話を繰り返し、同じ話を重ねる）

ここでの「だから」は、先行文脈に含まれている発話者の主張を共有させるために、聞き手に説明や説得をする役割を果たしている。すなわち、先行する発話で言ったこと、聞き手がまだ完全に理解していないと話し手が判断し、「だから」を使うことによってもう一回先行の発話を繰り返すのである。

例 4

「お医者さんへ、行ってみたか」

女はうつ向いたまま、動かなかった。(中略)

「違うかもしれないの」

「何が違うんだ」

「まだはっきり、そうと決まった訳じゃないのよ。そうかも知れないと思っただけなのよ」

「だからさ、それをはっきりさせる為に医者へ行ってみるんじゃないか。何でもなかったら問題ないさ。もしか本当だったら困るから、今のうちに手を打つんだ。こんな簡単なことが、どうして解らないんだ」

(石川達三『青春の蹉跎』)

例 4 では、先行する発話「お医者さんへ、行ってみたか」は、間接発話行為で単なる質問であるが、実際に裏側に潜んでいる意思は、お医者さんへ行く勧めである。また、その後聞き手が理解していないと判断して、「だから」によって、同じ話つまり「それをはっきりさせる為に医者へ行ってみるんじゃないか」を繰り返している。この場合の「だから」は「話を重ねる機能」として作用している。この機能は、さらに二つに分けられ

る。すなわち、聞き手が先行する発話を聞き取れなかったと判断する場合、また聞き手が理解できなかったと判断する場合に、「だから」によって、先行する発話を繰り返して述べるのである。

a. 聞き手が聞き取れなかったと判断する場合

例 5

「ねえ、何作ってんの？」

「ポテトグラタン」

「えっ、何？」

「だからポテトグラタン」

(<http://chat4.teacup.com/chat?r=15>)

例 6

(すでに駅員に対して「渋谷」と伝えている状況)

「じゃあ、どこからのぶんを払えば納得してもらえますか？」

と私は訊いた。

「あなたが乗ったところからです」と駅員は言った。

「だから、渋谷っていつてるでしょう」と私は言った。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

b. 聞き手が理解できなかったと判断する場合

例 7

莊 六：どこに隠している？

美津子：わからない

莊 六：早く出せよ

美津子：だから、わからない

(『生きてみたいもう一度—新宿バス放火事件』)

談話の展開における「だから」の機能

例 8

鯨やんはぼくの顔を眺めながら首をすこし斜めに上げて顎の下をぞりぞりとひっかく真似をした。別にそれは何の意味もないのだ。

ぼくは立上り、彼のそばに行った。

「種一から聞いたよ。本当なの？」

「まあな……」と鯨やんはひくい声で言った。

「そのうち、ちゃんと話すよ」

「本当に決めたの？」

「だから、そのうち、ちゃんと話すよ」

会社の中で話すのは具合が悪い、という気配だった。

(椎名誠『新橋鳥森口青春篇』)

例 9

「それは僕だって分かっているんだよ、ただあんな事を云われたのが、気持ちが悪かったと云うだけなんだよ」

「悪かったら、どうするって云うの？もうダンスなんか止めるって云うの？」

「止めなくってもいいけど、なるべく誤解されないように、用心した方がいいと云うのさ」

「あたし、今も云うように用心して付き合っているじゃないの」

「だから、僕は誤解していやあしないよ」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

八三

以上の例は、相手が先行の発話を理解していればすむはずだが、先行の文脈に含まれている意味を共有させるために、「だから」を使って相手に説得や説明をするのである。ここでの「だから」の例は、因果関係とは考えにくく、説明や説得が聞き手に対してのもので、「さっき言ったように」

「さっき言ったでしょう」という潜在的な意味を表している。

3.3 話を進める機能（前の話の結果や進行を述べる）

「話を進める機能」は話題展開機能の一種として、かなり複雑であるが、まずは、一つの談話を例にして、簡単に説明する。例文中の①～⑩は筆者が付した文章番号である。

例10

上野：①政府の政策ははっきり北欧型とはちがいますが、社会の性格が共同体的なものを残しているということに関してはどうでしょう。②例えば日米経営論争なんかでよく言われるのは、日本では一定の集団のメンバーシップを持った人々の間では、完全な互助と一種の平等主義があって…

大熊：③だからそれはね、こういう言い方が当たっているんですよ。

④日本の福祉は会社の中にある、特に一流企業に

上野：⑤企業福祉ですね。

大熊：⑥そう、企業が福祉を背負っている。⑦だから日本では、経営のしっかりした大きな会社に属している人は大型のいいシステムの中にぬくぬくとしていられるという、そういう福祉なんですね。⑧日本では、福祉を会社がやっているとせばいいんです。

上野：⑨なるほど。⑩日本は企業社会主義の国なんだ。

（上野千鶴子『40歳からの老いの探検学』）

上の例10の文③の「だから」は、文①の回答であるはずだが、発話者は接続詞「だから」によって発話権を取得し、自分の話を続けるための手段として使われる。ここでは、因果関係らしいものを感じられないのは明ら

談話の展開における「だから」の機能

かである。この種の「だから」は、相手の話を引き取り、続けていく機能を持ち、必ずしも因果関係という論理的な意味を表すものではない。すなわち、「話を進める機能」という談話展開機能の一種と考えられる。一方、文⑦の「だから」は、大熊が自分の発話⑥の内容を因果関係でつなげるが、この用法も言うまでもなく「話を進める機能」を持っている。

数多くの「だから」の談話例は「話を進める機能」を示すが、因果関係が強いかどうかということによって、さらに以下の二つの部分に分けて説明できる。

(1) 因果関係が強い

発話の効果と「だから」前後の意味関係で、さらに以下の結果の導入と結果への納得の2種類に分けて、「だから」は如何に話題を展開させるかを確認する。

a. 結果の導入

このタイプは、前件の事柄が原因・理由で、「だから」によって後件の確定的な結果を導くのである。ここでの「だから」は接続詞としてのもっとも基本的な用法である。

例11

岩田さんは生まれつきの全盲である。だから絵本を手にした子に「これは？」とたずねられても、答えてやれない。

(朝日新聞1987年5月30日)

八
一

例12

雪子：お母さんに頼んで、お金都合してもらえば、新しく部屋借りるのに。礼金、敷金持っていないでしょう。だから、ここで

暮らすなんて。お兄ちゃん言いくかったら、私、連絡してあげる。

菊雄：よせよ。金のことで家に電話なんかするな。

（『妹よ』）

例13

それから又内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧供講説などの屢行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従ってここへ出入する僧俗の類も甚多い。内供はこう云う人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらない。まして柑子色の帽子や、椎鈍の法衣などは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、唯、鼻を見た。

（芥川龍之介『鼻』）

例11は、岩田さんは全盲であることが原因で、「だから」によって、「絵本を手にした子に『これは?』とたずねられても、答えてやれない」という結果を招いている。例12は、妹である雪子は兄の菊雄との会話で、「新しく部屋借りるのに礼金、敷金持ってないん」という事実が原因で、「ここで暮らすなんて」という結果になるのである。例13は主人公である内供は自分の長い鼻が不安で、絶えず人の鼻を気にしており、「一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて」の気持ちが原因で、「内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらない」という結果を導くのである。このように、前件は原因で、「だから」は後件の結果を導き、「話を進める機能」を持っている。

談話の展開における「だから」の機能

b. 結果への納得

前件と後件は因果関係を示す。さらに、詳細に説明すると、この種の「だから」は前件で得た情報を後件の既知の知識や認識に結びつける用法である。「だから」が用いられるのは、次の二つの場合である。話し手がすでに以前から前件が理由であることを知っていて、聞き手に知らせるという場合と、話し手が初めて前件が理由であることに気づく場合である。前件で今得た情報を後件の既存の知識と結び付ける場合に、「のだ」が出てくることが多い。すなわち、「だから……のだ」という形式は結果への納得をあらわすことが多い。

例14

「雅弘くんてなんかとっても女になれてない」

「オレ姉貴3人もいるから」

「ふう～ん。だから年上の女のあつかいうまいんだ。」

(前原滋子『そばにおいでよ』)

例15

「一発でも二発でも撃てばよかったのよ。そうすればもっと温和しかったわ。」

「君が持てばよかったんだ。だから、渡すといったんだ。」

(山田太一『飛ぶ夢をしばらく見ない』)

例16

高木：高木です

雪子：さ、先はすみません。松井です。

高木：ああ。

雪子：あのう、今日私お店で……

高木：ああ、どうしてああいう言い方するんだい？僕は君といると
ほっとする。だから、誘ったんだ。

(『妹よ』)

以上の例から分かるように、「だから」はこれまでの発話者の既存の知識と結びつけ、後件の判断への納得を表している。それは、事態・対象間における関係から、発話者の認識世界領域の関係になって、「話を先へと進める機能」を果たしている。

(2) 因果関係が弱い

この場合の「だから」は、因果関係が弱く、ほとんど感じられないゆえに、その存在があまり意識されないようだが、実際この種の「だから」は談話の話題展開において、非常に重要な役割を果たしているのである。次に、発話の機能と効果から、この種の「だから」をさらに四つの種類に分けて、詳しく考察することにする。

a. 情報の追加

このタイプは、後件が前件に関わる事柄に情報を補う場合に、接続詞の「だから」が用いられる。発話者の伝えようとする意味が情報不足で、あるいは聞き手が認識不十分であると判断して、発話者はさらに情報を追加するのである。この場合の「だから」も「話を進める機能」を持っている。

例17

「じゃ、お母さんとも？」

「うん、半年ぐらい。」

「半年も話してないの？」

談話の展開における「だから」の機能

「俺が悪いんだけど……」

「そうよ、電話かけりゃあいいじゃない。」

「(苦笑して) 迷惑そうなんだ。」

「親が子供の電話を？」

「だから、向こうはね、俺がいなけりゃ、とてもいいわけよ。兄貴は、京都大学出て、じきに自分で事務所ひらく勢いだし、妹も同志社の二年で、いい女だしね。親父は公立高校の校長で、俺がいなきゃ、こんないい家はないわけよ。」

(山田太一『ふぞろいの林檎たち』)

例18

S：ニューオータニのプール券があるの。

L：ああ。

S：だから 4枚あるからね

(ザトラウスキー (1993) 勧誘誘場面の会話)

例17は、子供である発話者は親に電話をかけると迷惑になるという情報を伝えようとするが、聞き手が「親が子供の電話を？」と言い、事態認識が不十分で、前の内容に付加説明が必要なので、「だから」を用いるのである。例18も同様に、「ニューオータニのプール券があるの」は、「一緒に行かない?」「一緒に行きましょうか」など相手を誘う裏の意味を持つのだが、聞き手はただ「ああ」としか言わないので、話し手はこの応答から先行する発話で提供した情報不足が原因で、相手がまだ理解不十分であると判断して、「だから 4枚あるからねえ」と情報追加で付加説明をするのである。次の例19と例20の「だから」も、情報の補足の例である。

例19

S：でも、このサークルはあっちこっちにも行くからあ、野外で、
だからー

L：僕のサークルも行きますよ。あっちこっち行きますよー。僕ら
のやってるサークルも。

S：あっ、だからー、別に、その日の平日の活動でなくて、休日
とかも行くからあ。

(<http://chat4.teacup.com/chat?r=15>)

例20

菊雄：それは、俺、ずっと麗子さん一筋で。

雪子：へえ？

菊雄：だから、中学校の時から麗子さんだけを思い続けて。

雪子：お兄ちゃん……

(『妹よ』)

このように、聞き手の発話や応答から事態の認識の不十分さを判断し、聞き手に事態を十分に認識させようとする「だから」の情報の追加は、話をさらに進める機能を持っている。

b. 現場情報の確認

このタイプの話し手と聞き手の共通知識が生ずる根拠は現場にある。聞き手が現場から事実を理解できるはずだが、それに反して聞き手が理解できない様子をするので、発話者が確認する必要が生じるのである。以下の例では、「だから」は現場情報確認の機能を持っている。

談話の展開における「だから」の機能

例21

L：なに、もう帰るのー？

S：だから、いまーまだ9時でしょ。もうちょっといると思うけどー

(ザトラウスキー (1993) 勧誘場面の会話)

例22

L：あれ（一年前に買った机）は T ちゃんのでは。H ちゃんのは、
また隣に置くわけ？

S：だからね、今あそこに置いてるでしょ。それをそっちの部屋に
持って来て、向うに並べて寝させようと思っているのよ。

(http://chat.studio.cx/o-cha/syo_hajime)

例21では、当時「まだ9時」という現場の情報は聞き手が了解しなかったため、発話者は「だから」によって、話を進めたのである。潜在的な意味は、「あなたもわかるでしょう」「あなたも見たでしょう」である。また、例22では、現場のあそこに置いてある机は聞き手が理解できると認識するが、それにもかかわらず聞き手が不明瞭な様子で、「Hちゃんのは、また隣に置くわけ？」という疑問を出したため、「だから」を使って現場情報を確認するのである。この種の「だから」は、談話展開における「話を進める機能」を果たしている。

c. 場つなぎのマーク

大石 (1954) は、日常談話の接続詞の用法を次のように4種に分類している。

A. 前の語・句・文と後の語・句・文とをつなぐ役割を果たしているもの。(略) 先行する思想表現を持ち、それを受けて次の表現を導き

- 出す役割をつとめているものであり、(略)「元の意味」で用いられているもの。
- B. 前の語・句・文と後の語・句・文をつなぐという関係が明確にとらえにくいけれども、一つの意味を受けて、次の表現を導き出す役割を果たしているもの。(例) 別れぎわの「ジャア、コレデ失礼シマス。」など。
- C. つなぐはたらきをまったくもたない、(略) 接続表現のはたらきをなさないもの。いわゆる「遊びことば」「場つなぎことば」の類で、ほとんど無意味に置かれている。(例) 「しかし・だから・だって・でも」等のいわゆる逆説・順接の接続詞・軽い感動の心持を表す場合が多い。
- D. 言葉の中絶あるいは不整表現のために、A・B・Cのいずれに属するか判断の立たないもの。

ここで「だから」は、「場つなぎことば」の用法として、意味の上では前の発話とあまり直接的な関係はないが、話を先へと進める働きがある。この場合の「だから」は、談話の連鎖的構造に積極的に作用している。

例23

さんま：あのな、そ、ひとのな、あのね人間観察ばかりしてる場合やないねん。だから、どういことかな、思ったよりセツトが大きすぎるとか。

木村：うん。

さんま：こ、これはでもスタジオこれ大きすぎるんちがうのとか。いろいろあるわけよ。こっちは。

木村：はい。

(『さんタク』)

談話の展開における「だから」の機能

この「だから」は、これから発話者主体が自分の立場を詳しく説明するという行為を予告する際に使われる。「だから」は、後続する「思ったよりセットが大きすぎるとか」という説明の、前置きのような機能を果たしている。

例24

南：そうよ。ところが、あなたは誰？

瀬名：僕は、あの、だから、朝倉さんのルームメートの瀬名です。でも、朝倉さん荷物持って出て行っちゃったから、ルームメートじゃないんですけど。へえ、そんなに僕を睨まないでください。関係ないんですから。

南：じゃ、どうしたらいいの、どうしたらいい？

(『ロングバケーション』)

例25

南：へえ？今なんて？

杉崎：うん、だからその、うん、ようするに

南：ようするに？

杉崎：ばついち。

南：ばついち？

杉崎：そう。

(『ロングバケーション』)

例24、25の「だから」の例は、すべてテレビドラマ『ロングバケーション』から抜粋したものである。ここでは、「だから」は本来の意味で用いられておらず、次の話をする単なる場つなぎの合図となっている。ほとんど無意味であるが、談話の展開に積極的な役割を果たしている。

3.4 話をうながす機能（話が先へ進むように相手をうながす）

このタイプは、相手の文字通りの意味は理解できるが、その発話の真意が不明な場合、「だからなに?」「だから何ですか?」「だから……?」等の形で、相手の先行発話の真意を尋ねる用法である。

例26

真二：いや、ほら、この間ライブに来てたじゃん、涼子ちゃん

南：来てたよ。

真二：「来てたよ」、来てたって。

南：だから、なに？

真二：いや、ほら、おれに会いに来てたんだなあ。

(『ロングバケーション』)

例27

南：へえ、あの、そうじゃなくて。私ちょっと思い付いたんですけど、今、年の離れたカップルってそんなに珍しくないと思うんですよ。この間、あの、貴乃花となんでしたっけ？あの、アナウンサーの女の人。

瀬名：佐々木さん。

南：佐々木、佐々木さんのほう、ねえ。

瀬名：だから、なんですか。

南：じゃ、あと10分で式始めちゃうんですよ。私、あと10分あったら、あなた髭剃って、浴びて、きれいにできると思うし。ですからここは一つ。

瀬名：ここは一つなんですか。

南：私と結婚してください。

(『ロングバケーション』)

談話の展開における「だから」の機能

例28

六：「……女房がさ、入院したんだ」

美津子：「……」

六：「胃がんだって……」

美津子：「フーン……」

六：「聞いてみたけど転移しててな、この夏越せないだろうって……」

美津子：「だから……？」

六：「……」

(『生きてみたいもう一度—新宿バス放火事件』)

例26では、真二は涼子がこの間ライブに来たことを、南に伝えた。南はそのことが分かったが、「だから、なに」によって話が先へ進むように相手を促した。それで、真二は涼子が自分に会いに来たという発話の真意を言った。また、例27も同様に、南は年の離れたカップルの名人を列挙し、瀬名は文字通りの意味が分かったが、それについてさらに説明を求めるといふ目的で、「だから、なんですか」を使ったのである。例28では、「だから」の後ろの部分が省略されているが、「だから」を使うことによって、相手がいったい何を言いたいのかを聞いているのである。

要するに、以上の例は、相手の言ったことを相手の視点から見て、「だからどんな説明が続くのか」と問いかける姿勢である。すなわち、前の聞き手の発話を受けて、「それは分かったが、でも、あなたはいったいどういうことを言いたいのか」という意味で、接続詞の「だから」は「話をうながす機能」を果たしている。

七
一

3.5 話を一応終える機能（前の話をしめくくり、終了する）

ここでの「だから」は、前の話を終了するのに用いられる。また、先行

の発話をしめくくる機能を持っている。実際のコミュニケーションの場合に、この機能はかなり役立っている。

例29

「あの事？あの事なら、何とも思ってやしなくてよ。只私、吃驚しただけだったのよ。だって余り突然なんでもの。ほんとにそれだけよ」ここで彼女は更に声を落してつづけた。

「私ほんとは嬉しかったのだけわ」

「じゃ許して下さいですね」私の語尾は思わず戦えた。

「ほんとに何とも思ってしませんわ。だからもうこんな話はよしましょう。」

私は虚を衝かれた人のように、もう一歩も踏み出せなかった。が、たとえ少しでも自分の心持を云って了った後では、又たとえ操られているのにしても、彼女の答が好意を暗示するのを知った後では、重荷が下りたような気がした。

(久米正雄『学生時代』)

例30

しかし孤独の条件以外に孤独そのものがあるのか。死の条件以外に死そのものがあるであろうか。その条件以外にその実体を捉えることのできぬもの、——死も、孤独も、まことにかくの如きものであらうと思われる。しかも、実体性のないものは実在性のないものといえるか、またいわねばならないのであるか。

古代哲学は実体性のないところに実在性を考えることができなかつた。従ってそこでは、死も、そして孤独も、恰も闇が光の欠之と考えられたように、単に欠乏（ステレーシス）を意味するに過ぎなかつたであろう。しかるに近代人は条件に依って思考する。条件に依って思考することを教えたのは近代科学である。

談話の展開における「だから」の機能

だから近代科学は死の恐怖や孤独の恐怖の虚妄性を明かにしたのではなく、むしろその実在性を示したのである。

(三木清『人生論ノート』)

例29は、「私」は「彼女」といろいろ話し合ったが、最後に「だからもう、こんな話はよしましょう」と「彼女」が話をしめくくるのである。例30は、文法上では前件と後件を因果関係で結ぶが、話題展開においては、前の話をしめくくる意味を表し、「このように」と近い働きをするのは明らかである。

以上、多くの談話例を引用し、「だから」の話題展開機能を細かく考察してきたが、次は、佐久間（2000）「接続表現の文脈展開機能による分類」を参考に、「だから」の話題展開機能をまとめると、表2の通りとなる。

表2 「だから」の話題展開機能

	機 能	役 割
1	話を始める機能	新しい話を始める
2	話を重ねる機能	前の話を繰り返し、同じ話を重ねる
(1)	聞き手が先行する発話を聞き取れなかったと判断する場合	
(2)	聞き手が理解できなかったと判断する場合	
3	話を進める機能	前の話の結果や進行を述べる
(1)	因果関係が強い	
a	結果の導入	
b	結果への納得	
(2)	因果関係が弱い	
a	情報の追加	
b	現場情報の確認	
c	場つなぎのマーク	
4	話をうながす機能	話が先へ進むように相手を促す
5	話を一応終える機能	前の話をしめくくり、終了する

4 「だから」が談話の結束性と整合性に対する作用

接続表現の談話展開機能を考察する際、話題展開機能と発話のつながりの二方面から論ずる必要があると考えられている。前節では、「だから」の話題展開機能を5種類に分けて細かく考察することによって、「だから」は文法上、論理上の因果関係があるかないかとは別に、話題展開機能において重要な役割を持っていることが明らかになった。この節では、前節で得た結果を踏まえ、さらに「だから」が談話の結束性と整合性に対する作用について考察する。そのため、まず結束性と整合性の概念を概観する。

4.1 談話の結束性と整合性

Halliday and Hasan (1976) は次のように提案した。すなわち、テキストをテキストたらしめている特性はテキスト性であり、テキスト性を作り出すためのさまざまな手段が結束性である。結束性には文法的結束性と語彙的結束性の二種類がある。文法的結束性は (a) 指示 (b) 代用 (c) 省略 (d) 接続の四つに分かれる。また、語彙的結束性には、再叙とコロケーションがある。さらにHasan (1984) がのちに認めているように、十全なテキストを成立するために、整合性が備わっていないといけないのである。

また、亀山 (1999) は「整合性 (coherence) は談話全体の『自然さ』あるいは『すわりのよさ』というような広い意味で使われる。整合性を決めるのは言語的要素に限らない。常識、推論、連想など、非言語的要素も含めて、整合性は談話の意味的つながりの善し悪しをさす」⁽¹¹⁾と指摘している。それに対して、「結束性 (cohesion) は、様々な言語手段を使っての談話の言語的つながりを指す (Halliday & Hasan 1976)。使われる言語手段には例えば指示表現、代用表現、接続表現などがある」⁽¹²⁾。橋内

談話の展開における「だから」の機能

(1999)は、「結束性とは、語と語、句と句、文と文が互いに合ってまとまりのあるテキストを作り出すことをいう」⁽¹³⁾と定義した。また彼の論説によると、結束性のあるテキストを組み立てるには、文法上の結束性と語彙上の結束性が有効であると明示した。文法上の結束性（grammatical cohesion）はさらに同一物指示、代名詞、指示詞、比較語、代用、省略、つなぎ語（接続詞、副詞、副詞句）と分類した。接続詞のはたらきをつなぎ語の観点から分類すると、次の四つになる。(a)付加、(b)反意、(c)原因、(d)時。語彙上の結束性（lexical cohesion）は文連続の中で意味上関連性の濃い語を用いていけば、テキストはその結束性を増すのである。さらに繰り返し、類義語、上位語、総称語と分類した。この分野では、用語の訳語はさまざま、統一的でないと考えられている。「結束性」は「結束構造」「連関性」と、「整合性」は「首尾一貫性」「接続性」などと訳される場合がある。本論は亀山（1999）の論説を基準に、発話間の言語表現によるつながりのよさを結束性、発話間の意味的なまとまりのよさを整合性と呼ぶことにする。

4.2 「だから」が談話の結束性に対する作用

談話の基本的な機能は、情報を伝えるということである。談話を構成している話はいずれもそれに先行する発話とは別の新しい情報を含んでいる。この場合は、発話の集まりが談話を成しているのには、なんらかの形で提示される情報の連結性を示す仕組みが重要である。談話の理解は、局所における結束性一つをとっても、いろいろな要因が複合した過程と考えることができるだろう。

「だから」は先行発話と後続発話を因果関係で結ぶのが基本的な用法であるが、しかし実際の談話を見ると、「だから」はただ言語表現として談話情報を伝えるだけでなく、談話内で、次から次へと連結する「結束」(coreference chain)⁽¹⁴⁾としても機能している。談話の連続体は必ずしも意

味的につながっているものではなく、時々話題が変わったり、また、同じ話は何回も繰り返されたりするようなことはよくあるのである。3の節で分かったように、話題展開において、接続詞としての「だから」は重要な存在であると言わざるをえない。「だから」がなければ、談話を続行できず、先行発話と後続発話がばらばらになってまとまらなくなる場合もある。一つの談話を線状的連続体と見なすなら、「だから」はその連続体の節目のような存在である。文法上や論理上の意味と関係なく、この場合の「だから」は文と文をつないで、一つの言語記号として談話の結束性に大いに作用しているのである。具体的に、接続詞「だから」は話と話の間にどのようなつながりをつけるか、談話としての結束性を如何に保つかということについて、3の節の内容を振り返ろう。

前節の内容からもわかるように、「だから」は省略可能な場合と省略不可能な場合がある。例えば例23や例25などは、「だから」を省略しても、意味がつながっている。しかし、省略によって先行する発話と後続する発話の間に情報の連結性、すなわち結束性が弱まり、全体の文脈にすわりの悪さと不自然さを招く可能性がある。

それに対して、「だから」の省略できない場合が多いのである。前節で考察した5種類の話題展開の機能を考え合わせよう。以下のそれぞれのタイプに、一つずつの例を挙げる。説明の便宜上、前節の例1、8、16、26、29をもう一回見よう。

1) 話を始める機能

例1

さんま：そういう教育

木村：だめだ。

さんま：そういう教育。わかった？だから、今日は

木村：はい

談話の展開における「だから」の機能

さんま：てきとうなこと言うけども、君はやっぱりアイドルとか
スーパーアイドルやから、ここは放送しないでくれとか、
ここはやめて欲しいのは、後々、言ってくれよ。

(『さんタク』)

2) 話を重ねる機能

例 8

鯨やんはぼくの顔を眺めながら首をすこし斜めに上げて顎の下をぞりぞりとひっかく真似をした。別にそれは何の意味もないのだ。ぼくは立上り、彼のそばに行った。

「種一から聞いたよ。本当なの？」

「まあな……」と鯨やんはひくい声で言った。

「そのうち、ちゃんと話すよ」

「本当に決めたの？」

「だから、そのうち、ちゃんと話すよ」

会社の中で話すのは具合が悪い、という気配だった。

(椎名誠『新橋鳥森口青春篇』)

3) 話を進める機能

例16

高木：高木です

雪子：さ、先はすみません。松井です。

高木：ああ。

雪子：あのう、今日私お店で……

高木：ああ、どうしてああいう言い方するんだい？僕は君といると
ほっとする。だから、誘ったんだ。

(『妹よ』)

4) 話をうながす機能

例26

真二：いや、ほら、この間ライブに来てたじゃん、涼子ちゃん

南：来てたよ。

真二：「来てたよ」、来てたって。

南：だから、なに？

真二：いや、ほら、おれに会いに来てたんだなあ。

(『ロングバケーション』)

5) 話を一応終える機能

例29

「あの事？あの事なら、何とも思ってやしなくてよ。只私、吃驚しただけだったのよ。だって余り突然なんでもの。ほんとにそれだけよ」ここで彼女は更に声を落してつづけた。

「私ほんと嬉しかったのだけわ」

「じゃ許して下さいるんですね」私の語尾は思わず戦えた。

「ほんとに何とも思ってしませんわ。だからもうこんな話はよしましょう。」

私は虚を衝かれた人のように、もう一歩も踏み出せなかった。が、たとえ少しでも自分の心持を云って了った後では、又たとえ操られているのにしても、彼女の答が好意を暗示するのを知った後では、重荷が下りたような気がした。

(久米正雄『学生時代』)

以上の談話例からもわかるように、「だから」がなければ、前後の文脈が
つながらなくなり、談話が続行できなくなる場合がある。接続詞「だから」
が談話の結束性に対する作用は、因果関係の強いところに限らず、因果関

談話の展開における「だから」の機能

係の薄いところにも及んでいる。このように、談話展開において、「だから」を使って因果関係で話を進めるだけでなく、話題を変えたり、話を終えたり、また、同じ話を何回も繰り返したりするようなことがよく見られる。接続詞「だから」の結束性は談話全体に作用していると言えるだろう。

4.3 「だから」の結束性が整合性への貢献

言語上のつながりは談話全体の意味的つながりに通じるので、結束性は談話の全体の整合性にも影響を与える。「結束性は、言語の持つ意味と談話法によって決まるもので、これが他の非言語的な貢献要素、つまりコンテキスト、常識、推論、連想などどうまく組み合わさるかどうかで、全体の整合性が決まる。つまり、結束性は整合性への貢献要素の一つと見なすことができる」⁽¹⁵⁾。また、前節で考察したように「だから」は「話を始める機能」「話を重ねる機能」「話を進める機能」「話をうながす機能」と「話を一応終える機能」を持っており、談話展開のほとんどの段階において機能を持っていることがわかった。「だから」は文脈の連結において、談話の結束性に作用しているが、談話全体の意味的つながり、すなわち一貫性にも間接ながら作用している。

4.2の説明からわかるように、「だから」はばらばらになっている話を複合し、談話の展開に重要な役割を果たしている。「だから」によって言語的連結性から、内容の連結性へと進むのは、談話の結束性が整合性への貢献の表れである。すなわち、接続詞の「だから」は談話全体の整合性にも大いに作用していると言えるだろう。

5 終わりに

接続詞「だから」は一般的には結果を導く因果関係を表す文法的意味として、広く知られているが、しかし、実際のコミュニケーションの場合を

考えて見ると、因果関係を表さない用法もある。「だから」についての先行研究は若干あるが、いずれの研究も、談話における「だから」の話題展開機能並びに談話の結束性と整合性に対する作用について論じたことがない。本論は、先行研究を踏まえ、談話における「だから」の機能を解明する試みである。

いろいろなジャンルから資料を収集し、「だから」の話題展開機能を考察した。談話においては、「だから」を使って因果関係で話を進めるだけでなく、時々話題を変えたり、話を終えたり、また、同じ話を何回も繰り返したりするようなことがよく見られる。具体的な機能を以下にまとめる。

1) 「話を始める機能」(新しい話を始める)

ここでの「だから」は因果関係が弱い、「話を始める機能」を持ち、話題展開の言語手段として重要な役割を果たしている。「だから」で話題を始める場合と、前の話をそらして別の違う話を始める場合との二つのパターンがある。

2) 「話を重ねる機能」(前の話を繰り返し、同じ話を重ねる)

聞き手が先行する発話を聞き取れなかったと判断する場合、また聞き手が理解できなかったと判断する場合に、「だから」によって、先行する発話を繰り返して述べる。すなわち、先行文脈に含まれている発話者の主張を共有させるために、聞き手に説明や説得をする役割を果たしている。

3) 「話を進める機能」(前の話の結果や進行を述べる)

「話を進める機能」は話題展開機能の一種として、かなり複雑であるが、因果関係が強いのか、因果関係が弱いのかということによって、さらに二つの部分に分けて説明できる。

談話の展開における「だから」の機能

4) 「話をうながす機能」(話が先へ進むように相手をうながす)

相手の文字通りの意味は理解できるが、その発話の真意が不明な場合、「だからなに?」「だから何ですか」「だから……?」等の形で、相手の先行発話の真意を尋ねる用法である。

5) 「話を一応終える機能」(前の話をしめくくり、終了する)

ここでの「だから」は、前の話を終了するのに用いられる。また、先行の発話をしめくくる機能を持っている。実際のコミュニケーションの場合に、この機能はかなり役立っている。また、談話の連鎖的構造における結束性と整合性を保証するには、接続表現の「だから」は言語手段として、重要な役割を担っている。一つの談話が線状的連続体と思えば、「だから」はその連続体の節目のような存在である。文法上や論理上の意味と関係なく、この場合の「だから」は文と文をつなぎ、一つの言語記号として談話の結束性に大いに作用しているのである。

言語上のつながりは談話全体の意味的つながりに通じるので、結束性は談話の全体の整合性にも影響を与える。「だから」は理論上では談話の展開と連続的構造において、特別な重要性を持っていることは言うまでもない。実際のコミュニケーションの場でも、本研究の考察によって如何に談話を展開させるか、また如何に発話の複数の要素を考え合わせ、談話をスムーズに進行させるかという点において、「だから」は重要な役割を果たしていることが明らかになった。

なお、本論は談話展開における接続詞「だから」の機能について考察したが、「だから」は従来の文法的意味で前件と後件を結ぶだけでなく、単
六
一
に文脈を連結する鎖のような機能も持っている。「だから」と似ているような接続表現もほかにもあるはずである。それらの言葉に対する探求と考察を今後の課題としたい。

註

- (1) 半沢 (2001: 47)。
- (2) 同上。
- (3) メイナード (2004: 25)。
- (4) メイナード (1997: 12-13)。
- (5) 橋内 (1999: 55)。
- (6) メイナード (2004: 3)。
- (7) Moriの論説については、メイナード (2004) を参照せよ。
- (8) メイナード (2000) を参照。「場交渉論」では、3種の場に関連した6つの機能を認める。「認知の場」と関連して、「固定認知」と「命題構成」の機能、「表現の場」と関連して、「情的態度の表明」と「対他的態度の伝達」の機能、「相互行為の場」と関連して、「参加行為の管理」と「共話行為の調整」である。
- (9) 佐久間 (2000: 166-167)。
- (10) 佐久間 (2000: 167)。
- (11) 亀山 (1999: 97)。
- (12) 同上。
- (13) 橋内 (2000: 56)。
- (14) 亀山 (1999: 105)。
- (15) 亀山 (1999: 100)。

参考文献

- 宇佐美まゆみ・嶺田明美 (1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン：話者間の力関係による相違-日本語の場合」『日本語学・日本語教育論集』第2号、名古屋学院大学留学生別科、pp.130-145。
- 大石初太郎 (1954) 「日常談話の接続詞」『言葉生活』第36号、国立国語研究所、pp.37-42。
- 加藤薫 (1995) 「原因・理由を受けない『だから』-『だから』の主体側面の突出」『早稲田日本語研究』第3号、早稲田大学日本語学会、pp.14-31。
- 神尾昭雄・高見健一 (1998) 『談話と情報構造』、研究社出版。
- 亀山恵 (1999) 『談話と文脈』第三章、岩波書店。
- タールタード、マルコム／吉村昭市・貫井孝典訳 (1996) 『談話分析を学ぶ人のために』世界思想社 (orig. 1985)。
- 甲田直美 (2001) 『談話・テキストの展開のメカニズム-接続表現と談話標識の認知的考察-』風間書房。
- 佐久間まゆみ (1992) 「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学紀要文学部』第41号、日本女子大学文学部、pp.9-22。
- 佐久間まゆみ (1997) 『文章・談話のしくみ』おうふう。

談話の展開における「だから」の機能

- 佐久間まゆみ (2000) 『複文と談話』 第三章、岩波書店。
- 佐竹秀雄 (1995) 「若者ことばとレトリック」 『日本語学』 第14巻第11号、明治書院、pp.53-60。
- ザトラウスキー、ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』 くろしお出版。
- 谷崎和代 (1994) 「談話標識についての考察—『だから』を中心に」 『大阪大学言語文化学』 第3号、大阪大学言語文化学会、pp.79-93。
- 寺村秀夫・佐久間・杉戸清樹・半澤幹一 (1990) 『ケーススタディ日本語の文章・談話』 桜風社。
- 栃木由香 (1989) 「日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析：話の展開と接続形式を中心として」 『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』 第5号、筑波大学、pp.159-174。
- 栃木由香 (1995) 「日本語中級学習者の話しことばのテキストの型—接続表現の使用を中心に—」 『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』 第5号、筑波大学、pp.79-93。
- 中田智子 (1992) 「会話の方策としてのくり返し」 国立国語研究所報告 104 研究報告集 13
- 中村明編 (2002) 『現代日本語必携』 学燈社。
- 橋内武 (2000) 『ディスコース—談話の織りなす世界—』 くろしお出版。
- 蓮沼昭子 (1991) 「対話における「だから」の機能」 『姫路独協大学外国語学部紀要』 第4号、姫路獨協大学、pp.137-154。
- ハリディ、M.A.K・ハサン、ルカイヤ／安藤貞雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭輔訳 (1997) 『テキストはどのように構成されるか—言語の結束性—』 ひつじ書房 (orig. 1976)。
- 半沢幹一 (2001) 「文章の種類と執筆」 『現代日本語講座』 (飛田良文・佐藤武義編) 第2巻「表現」。
- ブレイクモア、タイアン／武内道子・山崎英一訳 (1993) 『ひとは発話をどう理解するか』 ひつじ書房 (orig. 1992)。
- メイナード、泉子・K (1997) 『談話分析の可能性：理論・方法・日本語の表現性』 くろしお出版。
- メイナード、泉子・K (2000) 『情意の言語学：「場交渉論」と日本語表現のバトス』 くろしお出版。
- メイナード、泉子・K (2004) 『談話言語学』 くろしお出版。
- 李麗燕 (1999) 「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」：発話順番のやりとりとの関係を中心に」 『世界の日本語教育』、国際交流基金、pp.221-239。

Function of connective dakara in progressive discourse

REN Li¹, YIN Hu²

1 Department of Japanese, School of Foreign Languages, Changchun University of Science and Technology, People's Republic of China

2 Doctor's Course, Major in Politics at Graduate School of Institute of International Japan-Studies, Hosei University, Japan

Abstract

In this thesis we analyzed the functions of connective dakara, and clarified the influence of these function in discourse. Especially, we paid attention to “the function of start of conversation”, “the function of reduplication of conversation”, “the function of exchanging of conversation”, “the function of facilitation of conversation”, and “the function of tentative closing of conversation”, in the progressive conversation.

As a result, what we cleared were as follows. Firstly connective dacara has an important role as one of verbal meanings to ensure the cohesive relation and consistency in chain construction of discourse. And secondly connective dacarai also plays an important role to progress discourse or exchanging conversation smoothly considering complexity of discourse.

Key words: connective dakara, analysis of conversation, function of progressive conversation, cohesion, consistency